

思い出カジノ

眞山 マサハル

赤いカジノチップを一枚、スペードの3の札の上に置く。僕のベットを確認すると、ディーラーは口髭をちよっとひねり、一組のランプを手に取った。ひと呼吸おいて、彼はグリーンフェルトを張ったテーブルに、二枚の札を並べた。

「ジャックルーズ、スリーウィン」

僕の勝ちだ。赤いチップが二枚になって返ってきた。手を触れると、チップはパッと消え去り、頭の中に「記憶」がじわりと滲みこんできた。

——ああ、なくした万年筆、あんな所にしまってたのか。

赤羽駅の東口から南の方に歩き、一方通行の通りをいくつか抜けた先にその不思議なカジノがあった。店の名はエリカという。およそカジノらしくない店名だ。アイルランドのパブみたいな調度の店内には、テーブルが一つと初老のディーラーが一人きり。彼はい

つも無表情で、口髭が素敵で、いつも同じ黒のベストを羽織っていた。生まれたときからカジノにいました、といった雰囲気の人だ。

ここでは金品の授受は一切ない。その代わり、客はめいめいの記憶を賭ける。美しいエピソードや、大事な思い出は高額チップになる。一方、昨日の朝食のメニューみたいな本人にとっても些末な事は、チップに替えてもらえない。賭けに勝てば忘れていた記憶を一つ手に入れ、負ければ一つ忘れる。ただし、摩ってしまった記憶は、勝っても取り戻せない。

扱っているゲームもちょっと珍しい。なんとファロ以外の賭けは一切ないのだ。たいていの客は、ファロなんてまるで知らないから初めは面食らう。でも心配はいらない、この遊びは実に単純だ。プレイヤーができるのは、好きな数字を選んでベットすること、それだけ。あとはディーラーがめくるランプを見ていればいい。右側、つまりウインの方のカードに賭けていたプレイヤーが勝ち、ルーズの方はチップ没収となる。要すれば運だけのギャンブルだ。

人はだれでも、膨大な量の情報を記憶し、同じくらい膨大な量の物忘れをする。だから運任せの博打で少々記憶が欠けたところで、川の水をスポイトで汲ぶようなもの、せいぜ

い誤差レベルの話だ。僕はそう思ってエリカ、この思い出カジノに通っていた。

風のない、さびしい冬の夜だった。薄ぼんやりと曇った空に、ときおり、冷たい月が漉き出されては浮かび上がっていた。

その日は二勝二敗、水道料金の支払期限が明日であることと、万年筆の所在を思い出した。忘れた方は、何を忘れたかすら思い出せないので気にしない。柱時計が十一時を打った。今日はもう遅いからと帰りかけたときだった。

古いオークのドアがおずおずと開いた。

「まだやってますか？」

「ええ、いらっしやいませ。お好きな席へどうぞ」

テーブルに就いたのは二十二、三の女客だった。ジル・スチュアートのスカートがよく似合う綺麗な人だが、目が少し赤いし、すっぴんだ。さっきまで泣いていたんだろう。

彼女はテーブルに備え付けの白紙に無心でペンを走らせ、書き終わると折りたたんでディーラーに渡した。この店ではこんな風にして思い出をチップに交換するのだ。

「これでチップにできますか」

「お預かりします」

ディーラーの節くれだった手が畳まれたままの紙片をひと撫でする。その瞬間に紙片は五枚の黒いチップになった。

黒が五枚！ 僕はぎよっとして彼女を見た。黒は一番高いチップだ。僕が賭けていた赤チップの二十倍の価値があり、それが五枚、都合百倍の大勝負になる。ディーラーも少し驚いたのか、彼女に念押しした。

「とても大切な思い出のようですが、よろしいのですか」

「いいんです、あんな奴のことなんか。もう知りません」

彼女は吐き捨てるように答えた。細いタバコに火をつけ、一ふかししてから足を組んだ。チップを掴むと、五枚全部をどん、と無造作に9に賭けた。

「これでいいです」

「かしこまりました。では——ファイブルーズ、キングウィン」

「続けてください」

「ナインルーズ、セブンウィン」

あっけない。五枚の黒チップは、たった2ターンで溶けてしまった。

「……あーあ、負けちゃった」

彼女はしばらくテーブルを見つめていたが、一服したらすぐに帰っていった。席を立つ頃には見違えるほど確りしていた。

再び僕とディーラーの二人だけになった。シーリングファンの音が聞こえそうなくらい静かだ。ディーラーは僕の方を見ずに、ぽそりとつぶやいた。

「たまにね、ああいうお客さんもいらっしゃるんですよ」

「ああいう？」

「忘れるために賭けるお客さんです」

「なるほどね、そういうやり方もあるんだ」

「あまりお勧めはできません。捨てたつもりの記憶を誰かに掘り起こされてしまうこともありますので」

「負けたときに賭けてた記憶は取り返せないんでしょ？」

「負けたご本人はそうですね。他の方なら、確率こそかなり低いですが、不可能ではないですよ」

「へえ、知らなかった」

「常連さんだけの裏メニューのようなものです」

そんなことを言われると俄かに好奇心が湧いてきた。切り上げるつもりだったが、もうひと勝負していこう。万年筆の所在の記憶を赤チップに交換し、クイーンに賭けた。

「じゃあ、勝ったらナポレオンの記憶をひとつ」

「申し訳ありません、扱えるのは存命の方の記憶のみです。それも個人的にご存知の方に限られます」

そういうことはもう少し早く言ってほしい。少しばかり意気を削がれたが、同時にいたずら心が動き出したのを感じた。それでつい、こんなことを口走ってしまった。

「それなら、ディーラーさんの記憶にするよ」

さすがのディーラーも迷惑そうな顔をしたが、それも一瞬のことで、すぐにトランプを手にした。

「よろしいですよ。エースルーズ、クイーンウィン」

欲がないときは運も味方をするのか、1ターンであっさりけりが付いた。倍になった赤チップを目の前にして、今更ながら気後れしたものの、勝ってしまったものは仕方ないとおもむろにチップをつまむ。指先にプラスチックの硬さを感じると同時に、ディーラーの

失われていた記憶が、奔流となって僕の頭に流れ込んできた。

男がいた。彼はこのカジノの常連だった。賭け事が好きで来ていた訳ではない。儲けたカジノチップは全て持ち帰り、妻に触れさせた。すると、うつろだった妻の瞳に、かすかに光が差した。妻の病気は若年性アルツハイマーだった。チップは、一時的に妻の見当識を回復させた。病気の進行を遅らせる効果まではなかったが、それでも男は嬉しかった。

ある夜、例の如く妻にチップを渡したが、妻は無反応だった。何枚触れさせても、まるで効果がないようだった。「おい、俺がわかるか」声を掛けた男に対して、妻はうつろな目で首を傾げただけだった。もはや妻の記憶は風前の灯火だった。

男はカジノに走りこむと、血眼になって賭け続けた。奇妙なことに、男はまるで勝てなかった。故郷の町の思い出、学生の頃の初恋、仕事のマニユアル、チップにできるものは何でも賭けた。それを擦ってしまうと、バカラ、ブラックジャック、ポーカー、そのほか様々なゲームの遊び方も賭けた。それでも足りず、今までの勝負の記憶も全てつき込んだ。とうとう賭けるものがなくなったので、男は自分の名前を賭けた。

男は負けた。百枚の黒チップが霧散するのを見届けると、男の意識もぷつりと途絶えた。

明くる朝、目を覚ました男は、自分が着慣れぬベストを着ていることに気付いた。続いて手が視界に入る。自分の指はこんなに骨ばっていただろうか。どうも体の感覚がいつもと違うようだ。特に鼻の下のあたり。

違和感の正体を確かめようと顔に触れた。瞬間、男は目を見開いた。――ある。髭だ。口髭がある。それは昨日までは無かったものだ。慌ててトイレに駆け込み、洗面台の鏡に張り付いた。

今や男は確信した。男はディーラーに成り代ってしまったのだ。昨晚、何を賭けたのか思い出せない。だが勝負に敗れた結果として、自分自身が消滅したらしいことは大方推測できた。

ディーラーはしばらく鏡と向き合っていたが、やにわにテーブルに戻ると、今朝目覚めてからの自分の記憶をチップに替えた。そして自分がディーラーとなり、唯一覚えているゲーム、ファロを始め、負けるまで続けた。

こうして、ディーラーは自らの過去を忘却の沼に沈めた。



「お客さん」

はっとして周囲を確認する。

いつもの黒檀のカジノテーブル、そして先程と同じ時刻の柱時計。随分長い時間が経ったように思ったが、実際は一瞬の出来事だったようだ。

「ディーラーさん、あなたは……」僕は言を継ぐことができなかった。

「いかがでしたか。赤チップですから、きっと貴方にとってはつまらない記憶でしたでしょう。お恥ずかしい」

「いや、そんなことは。でも」

でも、ひとつ、気になることがあった。先ほどのディーラーの過去の中では、店の名前はエリカではなかった。つまり、今の店名はディーラーが命名したことになる。

「……ディーラーさん、変なことを訊くようだけど、ひとつだけ伺っても？」

「どうぞご遠慮なく」

「このお店の名前、エリカっていうのは、どういう由来なの」

「家内が好きだった花の名前ですね。もっとも家内は随分前に亡くしましたが」

ディーラーは、静かに、遠くを見るような目で微笑んでいた。

ああ、この人は。この人は自分の全てを喪っても、妻との思い出は欠かすことなく抱えていたのだ。

その日はそれ以上の勝負をする気にはなれなかった。

ディーラーに挨拶して店を出ると、外は小雪が散っていた。駅までの道すがら、忘れるために賭けた女客のことと、忘れられないために賭けたディーラーのことを頭の中で反芻していた。どちらも同じくらい理解できる気がしたし、同じくらい間違っている気がした。

それからエリカには行っていない。駅から店までの道も、もう忘れてしまった。